

問 1. 天皇の役割や活動についてどのように考えるか。

天皇陛下は、あまりにも幅広い役割を担っておられる。その中で、祭祀、そして国事行為が重要な役割・活動であると思うが、これらは、国民として知ろうと思わなければ、必ずしも日常の中で直接的に実感する機会は少ないのではないかとも思う。

一方で、春・秋の園遊会等での華やかな場での両陛下の交流のお姿を見るにつけ、また、地方に訪問された際、その地に来られた時だけでなく、来られたずっと後も、その地域の人々が誇りに思い、励まされ、心の支えにしていることを、旅行先で天皇・皇后両陛下の写真などを見ることを通じ、実感した。

私自身も、京都で一度、偶然に美智子皇后陛下が乗っておられたお車が、歩いていた道の近くを通り、お手振りのお姿に接することができたことがある。一瞬ではあったが、心に残る貴重な体験だった。私の従姉妹が看護師となった際にも、美智子皇后陛下から式典で賞状を頂戴し、今に至るまでそのことを励みにしていると言っていたことを思い出す。

さらに、地震等の天災のたびに被災地を訪問され、被災された方々と同じ目線で言葉を交わされる姿を見て、どれだけ尊い身分であられても、慈悲の心で大変な状況にある人々に接することの大切さを学んだ。地震が頻繁に起こる国に住む不安な気持ちを支えて下さっていると思う。被災された方々だけでなく、地震の多い国で暮らす他の国民も、そのお姿に随分勇気づけられたのではないか。

あわせて、日本中あるいは海外でこれまでにどのようなことがあったか、歴史が大きく動いた出来事に向き合うことができる。天皇・皇后両陛下が、沖縄、グアム、サイパン、フィリピン、パラオ等の激戦地に赴き慰霊訪問をされたことを通じて、日本のこれまで辿ってきた歴史を学び、考え直した。青空と海に囲まれた美しい景色のなかに、当時どれだけの悲劇があったかを、慰霊されるお姿を通して思いをはせた。

このように、天皇・皇后両陛下の役割・活動は、大変頼りになるものであり、国民として純粋に嬉しく、励みにも勇気にもなるものである。自分自身だけでなく、自分以外に大変な目に遭った方々を労わる大切さも学ぶこともできる。災害や、慰霊の場所を天皇・皇后両陛下が訪れるニュースは、ただただ感動する。

一方で、ご高齢や、心身の不調がある際まで、遠くまで、長い時間をかけて行かれるのを見てみると、ご負担を心配せざるを得ない時もある。

大きな被害に苦しみ、悲しむ人々を励ますのは、精神的にかなりの重労働なのではないだろうか。相手の気持ちが跳ね返ってきて、心を痛められたことも多々あったと思う。特に、ご退位前の上皇・上皇后両陛下におかれては、ご高齢になるにつれ、ご移動の負担や過密なスケジュールの疲労などを心配する気持ちが強くなった。

今上天皇・皇后両陛下におかれても、例えば直近において、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、医療従事者の負担増や、多くの国民が不安を感じていることに、心を痛められていたと思う。人と人との接触が難しくなったことで、今までされてこられたようなご訪問も難しく、心を砕かれたのではないかとと思う。リモートで医療従事者を激励された話を聞いた際は、手段が限られている中でも精一杯国民に寄り添おうとされる姿に感動したし、多くの国民も同様の感情ではないかと思う。

問 2. 皇族の役割や活動についてどのように考えるか。

皇族の方々が、各種式典や国際的・全国的な種々の大会・行事等にご臨席されることは、その大会・行事に参加する方々にとり、大変な励みになると思う。

また、皇族の方々が諸外国をご訪問され、各国の王室の方々とお会いになった際は、それが広く人々の目に届き、私自身もその姿を見て、諸外国の王室を知る機会に接することができた。訪問先の国々で、皇族の方々が大いに歓待されているご様子は、一国民として励みになるものであった。訪問先の国の方々にとっても、自国の王室と日本の皇室の長い歴史を知る良い機会になるのではないかと思う。

他にも、例えば新年一般参賀において、今上天皇・皇后両陛下とともに、成年皇族の皆様がお集まりになるのは大変華やかであり、そのお姿を見るために、文字どおり道を埋め尽くすほどの多くの人々が毎年集まり、勇気づけられていることを見るにつけ、皇族の方々が多くの人々から愛されていると感じる。

問 3. 皇族数の減少についてどのように考えるか。

皇族数の減少には様々な原因があると思うが、長期間のスパンで、状況に合わせて、対応する必要があると思う。

ただ皇族数の減少が進み過ぎてからだと、手遅れになる可能性もある。皇室の存続が危ぶまれるような事態になることは、避けた方が良くはないか。

出生については、少子化の問題は皇室に限った話ではなく、今の日本社会でもなかなか解決できない、非常に難しい問題でもある。

長い皇室の歴史の中では、これまでも何度か、皇族の数の減少という問題が起きたこともあったと承知しているが、その都度策が講じられてきた。

今でもなお、こうして皇族の方々のご活躍されている背景には、その時々状況や、時代背景に応じた対応があったからと思われる。

問 4. 皇統に属する男系の男子である皇族のみが皇位継承資格を有し、女性皇族は婚姻に伴い皇族の身分を離れることとしている現行制度の意義をどのように考えるか。

今後、いつ、どのように制度の変更があるとしても、御本人が「ずっとこうだ」と言われてきた制度から、いきなりの変化が生じることは、動揺があるのではないかと思う。人生設計は個人の内面で、長い時間をかけてされてゆくものだと思う。関係する制度が、婚姻後の家庭環境にも関わってくる可能性がある。ただ一般的には、婚姻前の生活と、婚姻後の生活は大きく変わるものだと思う。家族を作ることだけでなく、自分のアイデンティティも、婚姻によって変わる部分は大きい。それは性別によって変わらないのに、性差によって違いがありすぎた場合、違和感がある人も多いのではないか。

問 5. 内親王・女王に皇位継承資格を認めることについてはどのように考えるか。その場合、皇位継承順位についてはどのように考えるか。

若い頃、百人一首のカルタをしている時、女性天皇である持統天皇の札を見て、女性の天皇もいらっしやったのかと思ったことが、今も強く印象に残っている。

また、詠まれる和歌を通じて、女性天皇がどのようなことを考えられ、どのような日本の四季に触れられていたかも、知ることができた。

国民の考えも時代により変わっていく中で、象徴としての天皇の存在を考えた時に、女性天皇の誕生を歓迎する風潮もあるかと思う。

皇位継承順位に関しては、今既に決まっている継承順位を軽く扱っていいのかという意見もあると思われる、今すぐ決められる問題でもないかもしれない。

問 6. 皇位継承資格を女系に拡大することについてはどのように考えるか。その場合、皇位継承順位についてはどのように考えるか。

永らく受け継がれてきた皇室の歴史、そして築き上げられた伝統へ敬意を払うことは大変重要だと思う。

女系天皇に関しては、今の時代にかけて、一部容認しても良いのではないかとの意見も出ているが、伝統を重んじる観点から、慎重に取り扱う必要があると考えられる。

問 7. 内親王・女王が婚姻後も皇族の身分を保持することについてはどのように考えるか。その場合、配偶者や生まれてくる子を皇族とすることについてはどのように考えるか。

慎重な検討が必要ではあるが、皇族の減少の問題を考慮に入れると、ありうる方向性ではないかと思う。ただし、そのような場合であっても、内親王殿下も女王殿下も、現在の制度を踏まえてのご自身の人生設計がおありかと思われ、すぐに制度を改めて適用するのは難しいのではないかと思う。

配偶者や生まれてくる子を皇族とすることについては、特に慎重な扱いが必要かと思う。新たに制度を作るなどして対処する必要があると思う。

問 8. 婚姻により皇族の身分を離れた元女性皇族が皇室の活動を支援することについてはどのように考えるか。

問 1、問 2 にも関連するが、皇族の方々は国民に愛され、国民を励まし勇気付ける存在である。他方で、皇族数は減少し、皇族の方々のご負担は増しているのではないかと思う。

このような事情を考慮したときに、元皇族女性により支援の手が増えることは、皇族の方々の負担軽減に貢献すると思う。

問 9. 皇統に属する男系の男子を下記①又は②により皇族とすることについてはどのように考えるか。その場合、皇位継承順位についてはどのように考えるか。

① 現行の皇室典範により皇族には認められていない養子縁組を可能とすること。

② 皇統に属する男系の男子を現在の皇族と別に新たに皇族とすること。

これまでの長い皇室の歴史においても、皇位継承の危機において、知恵を出し合い、皇統を遡り、伝統ある皇位継承を維持してきた経緯があり、皇族数が減少する現状において、現実的な案ではないかと思う。

厳密なルールは必要だと思うが、安定的な皇位継承確保の観点からも、皇室の歴史に整合的な形で養子縁組は可能ではないかと思う。

現在または将来の皇族の方々の、出生に関する様々なプレッシャーもあるのではないかと考える。

候補となる方のご意向もあるが、皇族数が減少している今、長い皇室の歴史を重んじつつ、元皇族の系譜の方々を然るべき形で皇族として改めて迎え入れ、皇室を支えて頂くことはこれまでの伝統に整合的ではないかと思う。

皇族数の減少と現在の皇族の方々のご負担増という差し迫った課題を踏まえて検討を進めるのがよいと思う。

問 10. 安定的な皇位継承を確保するための方策や、皇族数の減少に係る対応方策として、そのほかにもどのようなものが考えられるか。

長い伝統と歴史を持ち、国民に愛され、国民を励まし勇気付ける存在である皇室がこれからも長く続いていくためにも、皇族の方々の心身の負担が低減されることも重要だと考える。

プライバシーが保たれ、セキュリティが確保された上で、良い出会いが多く広がっているような環境でお過ごし頂くことが重要ではないか考える。